

---

# 【笑う門には福来る】

ログ核人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【笑う門には福来る】

### 【Nコード】

N0969G

### 【作者名】

ログ核人

### 【あらすじ】

キキは旅商のおっちゃんから“「豆まき」なる文化の話聞き、それをやるうとゼロに話を持ちかけ

【笑う門には福来る】

とある安宿の食堂で、

「ねえねっ！ “豆まき”しようよっ」

と快闊とした表情で言うのは、着古した半袖の白いシャツに膝丈のジーンズというラフな装いの、一見してまだ若い雰囲気の女性であった。肩口でカットされた外ハネな赤茶色の髪と、ヒップでちょこちょこ動く髪の毛と同色の二又なシッポが、どこかイタズラ好きっぽい躍動的な印象を与えている。

「なんで豆まかなきゃいけねんだよ。豆はまくもんじゃなくて、喰うもんだろうがよ」

円卓に腰を落ち着けて、お茶をすすりながらぶっきらぼうに答えるのは、一見して近寄りがたい黒々とした雰囲気を身にまとう、右眼に漆黒の眼帯をした敵めしい面構えの中年男性であった。ハイネツクの黒いセーターを着て、濃紺のジーンズをはき、腰を締めているベルトの左右から鞘に納まった剣を吊っている。

「だからさっ、旅商のおっちゃんに聞いた話だっって言ってるでしょっ」

眉間にシワを刻むオッサンの返答を聞いた女性はしかし、相手の反応を楽しんでいるような態度で、

「東の島国ジパングでは、季節の変わり目に“邪気ノ鬼”が生じるって考えられていて、それを追い払う為に、“邪気ノ鬼”に豆をぶつけて“邪気ノ鬼”を追い払って、一年の無病息災を願うんだって。魔を滅するで“マ・メ”だから豆を使うらしいよっ。でね、立春の前日の節分が今日なわけよっ。だからねっ、ゼロっ！ やろうよっ

！ 豆まきっ！ 近所のガキンちよも集めてさっ」

ニツと憎たらしいくらいに素晴らしい笑みを浮かべて、眼帯のオッサンを覗き込む。

「集めて、とか言う前に、もう集まってんじゃねえかよ……なあ、おい、キキ」

食堂内にワラワラと群れる近所のガキンちよ達を射殺するような鋭すぎる眼光で眺めながら、ゼロと呼ばれた眼帯のオッサンは嘆息した。

「となれば、もうやるっきゃないよねっ？」

キキと呼ばれた二又シツポな彼女は、「よっし！ よるぞおー！ とバンザイするがごとく両手を天に突き上げ嬉々と勇む。ガキンちよ達も楽しそうに『おおー！』とそれに応じる。

「……ったく。……はあ」

爪楊枝ぐらいなら挟めそうな深いシワを眉間に刻みつつ、渋々なから重い腰を上げたゼロに、

「じゃっ、鬼の役よつろしくねっ」

と、キキは木彫りの鬼の面を差し出す。

「……」

眼帯のオッサンは豆をごっそり突っ込めそうなほど鼻の穴を膨らませつつ、それを受け取り、

「お前え、コレどうしたんだよ？ こういう工芸品って意外と高えんだろ？ まさか、その旅商から買ったのか？」

「んっにゃ、もらった」

「なんで、くれんだよ」

「……ん？ それは当然」

キキは仁王立つと、

「私がポップでキュートだからに決まってるでしょっ」  
ふんぞり返るように胸を張って言い放つ。

「……自分で言ってる痛くないのか、お前え」

呆れを通り越して、もはや感心の態で言うゼロに、

「ふっふん」

キキは作り物めいた微笑みを投げやり

次瞬、スコツという軽い音と共に、オッサンの右眼を覆う眼帯に一振りの投擲用ナイフが突き刺さる。

とが、そんな二人のやりとりなんぞに興味のないガキンちよ達は、

『早く“豆まき”やろうよー！』

声高にシュプレヒコールを安宿の食堂内に轟かす。オッサンの眼帯にナイフが刺さったぐらいでは、ガキンちよ達の好奇心は止まらないようだ。

『早く、早く、早くっ！』

と急かすリズムカルなプレッシャーに負けたのか、

「……………」

ゼロは無言で眼帯に浅く突き刺さった投擲ナイフを引っこ抜くと、自分は刃のほうを持ち、キキには柄のほうを向けて差し出す。

キキも無言で、それを受け取ると背腰にあるホルスターへと納めた。そして転じて、

「さあ、さっ！ 始めよおー」

豆のはいつた布袋を掲げ、ガキンちよ達を木製の扉が開け放たれて開放的になつてゐる安宿の入り口へと先導する。

なんだかなあ……、と思いつつ鬼の面を片手につつ立つゼロに、  
「今日はずいぶんと楽しそうに賑やかだな」

と話しかけるのは、いつからそこに居たのか、白いブラウスに濃紫のスカートという清楚な印象を与える装いの、艶やかな長い黒髪を持つ精悍な顔立ちの女性であった。胸の前で組んだ腕の、左手には漆黒の鞘に納まった剣がある。

「ああ？ ああ、なんでも“豆まき”して一年の無病息災を願うんだとよ」

キキが豆をガキンちよ達に配るのを眺めつつ、ゼロは彼女に事の成り行きを説明した。

「なるほど。それでゼロは鬼の役というわけか……」

長い黒髪の女性は、鬼の面とゼロの顔を交互に見やり、

「なかなかどうして適役じゃないか」

笑いを含んだ声色で言う。

「けっ、やりたかねえのにやらされてる俺の身にもなりやがれってんだ」

と悪態を吐きつつも、ゼロは鬼の面を装着する。なんだかんだ言っても頼まれると断れないのが、このオッサンの悲しき性分であり、とても好いところだ。

「おっ！ リムちゃん。ねえねっ、リムちゃんも一緒にやろうよ“豆まき”っ」

ガキンちよ達に一通り豆を配り終えたキキは、そう言いながら軽快なステップで長い黒髪の女性にズイと身を近づけると、彼女の顔前に豆のはいつた布袋を掲げて見せる。

「そうだな、縁起ものだし、せっかくだから参加させてもらおう」  
表情をほころばせて快諾するリムちゃんと呼ばれし長い黒髪の女性に、キキは豆を分け　そして、

「鬼は」

グツと立てた親指で安宿入り口の外を示し、鬼と化したゼロにスタンバイしろと指示を出す。鬼なオッサンも無言でそれに従い、あまり気乗りしていないような足どりで外へと向かう。

それを見て、リムちゃん　リムティッシュは思わず、

「指先で使われる鬼の背に、どうして哀愁のようなものをかんじてしまうのは……なぜだろう」

呟かずにはいられなかった。

と、そんなこんなで“豆まき”は始まり、

『鬼はあゝ外あゝ』

なんか残念な雰囲気をかもしだす鬼なオッサンに豆の一斉掃射が放たれ、

「福はあゝ内いゝ」

安宿内にも豆はばらまかれ、

「鬼はあゝ外あゝ」

そろりそろりと撤退してゆく鬼なオッサンに豆の一斉掃射が放たれ

「おい、コラっ！ どさくさにまぎれて石投げやがったのは、どこのクソガキだこの野郎っ！」

撤退すると思われた鬼が、まさに鬼のごとく攻勢に出てきて……

まあ、なんだかんだで楽しく「豆まき」は終了し、

「もう二度とやらねえぞ」

とボヤキながら鬼の面を外すゼロを見ていたガキンちよの一人が、ボソリと一言、

「お面いらなくねえ」

それを聞いた他の面々も、あらためて鬼の面とゼロの顔面を見比べ、

「……確かに」

そう最初に言ったのは、笑いを堪えてほっぺたをヒクつかせているキキだった。

「ぷっ」

そして“笑いを押さえ込むダム”が最初に決壊したのもキキだった。お腹を抱えて笑い転げる彼女にあてられたのか、ガキンちよ達にも“笑い”は伝播し、果てにはもつとも冷静でありうるリムティッシュユまでもが声を上げて笑う。

そんな光景を見せられて、ゼロは面白くなさそうに鼻を鳴らし、

「……はあ」  
溜め息を漏らしながら円卓に腰を落ち着け、飲みかけのお茶をすすする。

その口元には、薄っすらと笑みが浮かんでいた。

【笑つ門には福来る】

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0969g/>

---

【笑う門には福来る】

2010年10月8日15時36分発行